

2025 年 4 月 10 日

2024 年度 北星学園附属高等学校に関する第三者評価

はじめに

本校は、評価（第三者評価）として、有限会社 Edu 企画川畑浩之氏に評価委員を委嘱している。北海道外、特に首都圏の教育内容、学校経営、運営の情報を、年に数回校長が川畑氏とオンラインもしくは対面で面談を行いつつ、報告とアドバイスを委託してきた。（メールなどでの情報交換は月に 1 回を目指し、校長のオーダーに川畑氏が調査報告を行ってきた）。以下、氏のレポートを抜粋して報告とする。

1. 2024 年度の特徴

新型コロナが 2023 年 5 月に第 5 類へ移行し感染対策は緩和され、2024 年度はほぼ新型コロナ以前の教育活動が再開できている。一方で、教育環境を取り巻く社会情勢は激しく変化し、特に全国的に少子化と教員不足が進んでいる。教職員の意識が変化に残り残されないために研鑽を続けることが課題である。もうひとつ、「2027 年 1 月には就学支援金施策の全国的な拡大は、今後の私学経営にどのような影響を与えるのか」という点については引き続き協議する必要がある。

そうした中で、2024 年度の入試において、252 名（定員:255 名）の新入生を確保できたことは、入試・広報活動や、教育内容、スクールバスも含め生徒のニーズに応えた募集戦略が順調に機能していると評価できる。何より 2024 年 3 月に卒業した生徒達のレポートや卒業セレモニーの報告を受けて、多くの卒業生が高校生活で得た充実感を抱いていたことが伺えた。これは、コロナ禍においても保護者の理解と支援のもと、教員が教育活動に尽力した成果である。このような循環が新たな新入生の獲得にも関係している。

また合格実績向上を目的として、一般受験での受験機会を増やし、合格者数の増加を図る取り組みを推進してきた。旧帝大の北海道大学、名古屋大学の理系学部合格、弘前大学、静岡県立大学などへの合格者も生み出している。特に、入試広報活動の強化により、学力向上を志す生徒層の確保に努めた結果、特進コースへの志願者が安定している。これに伴い、進学実績の向上を意識した指導体制の強化を行い、学習環境の改善が成果を出し始めている。

さらに、校長のリーダーシップのもと、在校生の満足度の維持、クラブ顧問も含め、全教職員で構築してきた教育活動の魅力を維持していくこと、また組織としての役割、コンプライアンスの遵守、ガバナンス体制を高める研修を続ける必要がある。特に、一部の教員に仕事や責任が集中しないようなマネジメントが求められており、この点は「働き方改革」にも通じるため、一層の注意が必要である。

2. 「教育支援チーム」の取り組み

入学アンケートに加えて、2022 年度に発足した「教育支援チーム」が生徒への定期アンケートを行っている。これは定期的に生徒の心身の状況を把握するために、校長、養護教諭と担当の英語科教諭、オン

ラインで外部の心理専門家（臨床心理士、特別支援教育士）を加えて行っている。これまでの手法では「学校の意図が伝わらない生徒」に、適切な指導を行えるように、外部の専門家から定期的にアドバイスを受けた。具体的には学園全体の取り組みとして6月よりSSW（スクールソーシャルワーカー）が非常勤で配置され、「教育支援チーム」と並行して現場で取り組んでいる。現場の教員や指導に活かされるには、さらなる連携の強化が必要である。2025年度は一体化させ、この取り組みを進めていく。

3. 学習指導、進路指導について

これまでの入学者と同様に、男女共に英語や基礎学力の指導など、きめ細かな指導を期待していると分析している。特に英語の少人数展開授業の実施などを通して、英語検定など外部試験の合格者が上昇している。また5年ぶりにカナダ語学研修（有志）が実施でき、参加できた生徒には刺激になったようである。こうした取り組みによって、語学力のある生徒が増えて、北星学園大学以外の（道内外の）大学に進学する事例が増えている。

しかし、海外の文化、歴史を通して学びや関心を深めるために企画してきた社会科研修旅行は、燃料費高騰、円安の影響もあり、計画段階で高額な旅行となることが分かり、検討に検討を重ねた結果、実施に至らなかったのは残念である。

2024年度の特色として、特進コースを中心に国公立大学や道外の難関私大への合格者を多数生み出すことができた。今後、更なる発展のためには特進コースの進学指導のあり方を継続させるシステム作りが必要である。例えば、一般受験生を増やすために、入試対策講座や模試の実施、学習環境の充実を図る施策を導入し、今後さらなる強化が求められる。

また生徒募集のための環境整備として、スクールバスの充実を進め、通学の利便性を向上させた。今後は文科省の進める「学びの多様化」に対応、推進するため、オンライン授業や多様な選択科目の充実を計画して実践していく。これにより、異なる学習スタイルに対応できる環境が整備しなければならない。

4. 期待される教育を創造し実践するための取り組み

以前から「探究」型の学習活動を推進しており、これは魅力のひとつである。特にICTを活用して、プレゼン作成や、発表、意見交換の場など「新しい学力観」に基づく教育を推進している。これらをさらにブラッシュアップさせるために外部の研修会への積極的な参加を教員に促していくことが望ましい。2023年度から、学園が全教職員に統一したタブレットPCを配布した。Teamsを使用した連絡の共有、そして会議資料のペーパーレス化が進んでいる。更なるDX化の推進を図ることで、厳しい環境を乗り越えていく。

（教育コンサルタント 有限会社 Edu 企画 川畑浩之）